

就学前親子における防災 —台湾の防災教育と日本の子育て支援ルームの実践から—

名須川 知子 翁 麗芳 磯野 久美子
(兵庫教育大学) (台北教育大学) (兵庫教育大学)

防災教育については、幼稚園・小学校からの学校教育の中では多く取り扱われ、防災訓練も実施されているが、就学前親子に関わる防災等も含めて、十分な知識、訓練がなされているとは言えない。そこで、本論文では、防災教育について、国家として一貫した方向で実施している台湾の実態と、その教材について、台北教育大学の翁麗芳との共同研究を実施し、その成果と兵庫教育大学の子育て支援ルーム「かとう GENKi」での親子での防災教育の実践をとおして、就学前の防災教育としての実践とその根底の理念について考察した。その結果、台湾での防災教育の実際と、周知の方法、危機感の共有方法は、本ルームにおいても実際の講座を繰り返すことで、意識の向上、特に、いつ来るかわからない災害への備えの意識を高めていくことがわかった。その意識の形成は、しっかりと時間をかけて着実に保護者や子どもの環境に対する理解と思いやりを育てていくという方針を忘れずに進めるべきである。

キーワード：就学前の防災教育 セミナー（講座）

はじめに

防災教育については、幼稚園・小学校からの学校教育の中では多く取り扱われるようになり、毎年、子どもたちの防災訓練も実施されている。しかし、就学前親子に関わる防災等も含めて、十分な知識、訓練がなされているとは言えない状態である。また、就学前に行われている防災教育も個々の事例としては充実しているものの日本で一貫した考え方や方法が確立されているわけではない。

さらに、その根底となる自然との関わり方、すなわち自然への恩恵と脅威、畏敬がはぐくまれることが防災教育の目的、ねらいにならなければ、単なる訓練としてだけの防災教育であり、その活動を通じた訓練とはなり難いものである¹⁾。

そこで、本論文では、防災教育について、国家として一貫した方向で実施している防災教育の先進国である台湾の実態、そして、その教材について、台北教育大学の翁麗芳²⁾との共同研究から得た知見を基に、本学の子育て支援ルーム「かとう GENKi」（以下、本ルームと称す）での親子での防災教育の実践をとおして、就学前の防災教育としての実践とその根底の理念について考察したい。

1. 台湾の就学前における防災教育

(1) 台湾の幼児教育制度と防災教育

台湾は日本と同様に、環太平洋造山帯に位置し、地震や台風が多発国であって、近年の気候変動の影響で、風災、水災、土石流災害、急斜傾地災害の潜在的リスクがさらに高まっている。防災や防災教育は国家の重大課題で、『災害防救法』（2000年制定）をもとに関係各省庁においては災害防止・減少の各種事業を実施・展開しているが、よい成果とは言い難い。地震や台風発生後はしばらく防災、減災は世論の焦点となるが、「天災難測」や「人生無常」という消極的に片付けてしまい、防災意識向上の難しい社会である。

一方、台湾は日本と同様に経済発展とともに少子化傾向で、教育熱心または早期教育過熱化の風潮が続いている。体系的な就学前教育プログラムを構築、質の高い幼児教育の実施は、政府としての重大課題であり、親の期待でもある。したがって子どもの安全の確保、さらに就学前の段階での災害に関する知識の習得や回避スキル育成が重要な課題となっている。では、先ずはここ十年の幼児教育と保育状況と防災モデル園計画を描き、幼児園防災セミナー、親子の防災頭巾のつどいを取り上げて、台湾が模索し

ている就学前における防災教育について述べる。台湾は、2011年6月に『幼児教育と保育法』を公布、2012年1月1日から幼稚園と託児所が統合して「幼稚園」（2歳から就学前まで、教育部主管）となり、幼託一元化政策が実行した。幼託一元化政策が始まると、幼稚園（もと幼稚園や託児所）のカリキュラム、環境、教育目標等が見直され、各地で新・幼稚園教育と保育活動要綱推進の研修会が積極的に行われた。

また、1990年代からすでに幼稚園評価、専門家実地指導制度は実施されていたが、一元化施策を実施後にされた幼児教育の質向上はあらたに課題となり、幼稚園評価制度はさらに緻密に取り組むこととなった。また家庭の教育力の低下を鑑み、子育て家庭の手助けとして、「親職講座」開催も幼稚園の任務の一つに定めている。

この幼託一元化政策は就学前防災教育の推進と時期が重なっている。教育部の委託研究成果として、2010年に幼稚園の防災教育教材と幼稚園幼児防災プレイブックセットが出版された。5つの災害（震災、火災、風災、水災、エンテロウイルス）と、4つの事故（交通事故、暴力事故、落下・衝突事故、熱傷事故）をテーマに、幼稚園現場の教案作成や子ども絵本の10の冊子の他に、デジタル学習教材（CDと公式災害救助デジタル学習ネット）を同時に公開して、幼稚園での防災教育を推進した。

さらに、幼託一元化政策によって「幼稚園」が就学前機関と位置づけられ、正式に教育体系に組み込まれることとなったことをきっかけとして、教育部は幼稚園防災教育実験モデル園計画を立ち上げた。計画の趣旨は各地で防災の模範的な幼稚園を立ち上げ、地方の防災教育の宣伝および指導の役割を果たすことである。この結果、全国幼稚園数は6千余りある中で2014年からの3年間に24の防災モデル園が整備されるようになった。各防災モデル園は1年の期間で、就学前防災教育専門家チームの3回の入園指導を受け、環境安全や避難演習などの改善を行い、園の希望次第で専門家チームは園の保育者や保護者対象の防災セミナーの開催に協力するシステムとなっている。24の防災モデル園の実験は器具の充実や保育者と子どもたちの防災能力向上についてはよい成果を収めたといわれている。しかし、モデル園施策は国家主導であり、一般の園に普及できるか疑問であるが、幼稚園防災セミナーの実施は予想外の人気を博したことは専門家の間で話題となっている。小、中学校に比べて幼稚園は家庭と地域とより緊密でしかも信頼的な関係をもっている。情報化、当事者意識が高まっている現在であるためか、あえて自分から防災セミナーに参加する民衆は少ないと思われるが、幼稚園防災教育や防災イベントは、子育て世代の防災教育の入り口となったことは事実である。

（2）幼稚園防災セミナー

2012年以降、親のための子育て講座開催は幼稚園の義務とされているが、保護者の関心をひく題材や講師を企画することは難しい。しかし、上述した防災モデル園が取り掛かった防災セミナーは、一般の子育て講座に比べ、目新しい題材と講師でよい反響を得た。防災の専門家が幼稚園で対面して防災の知識とスキルを伝授、園の建築や設備、そしてわが子の日常生活に触れながら、保護者と保育者が一体となって防災・減災を考える内容は、防災教育だけでなく、園と子どもの家庭と地域との連携に役立ったといわれている。また、普段は幼稚園と縁のない災害専門家はこうした機会に地域の特性を再考し、地域防災の取り組みにとってもメリットが多いと思われる。

2018年の台中市山間部のある幼稚園の実例を取り上げてみよう。11月某日9時半-11時で開催した防災ワークショップである。へき地の小型幼稚園であるため、平日の保育時間で開催、園児とその家族を対象とし、当日の参加者は2-5歳の子ども25人、24-70歳の保護者15人（中2人は赤ちゃん連れ）、保育者3人であった。講師は先月他の町で起きた火事報道のビデオ映像を見せ、大人全員によるディスカッションの形で火事発生の原因を分析して、家庭で電源、ガス使用の留意点を考えた。また、写真と挿絵を使って、地震災害をディスカッションした。生々しい災害現場の写真や映像に会場では驚愕な声があったが、園児たちの子どもらしい発言があり、大人たちを笑わせ、厳粛だった雰囲気を和ま

せることとなった。

当地域は過疎地で、日常的に高齢者と小さい子どもしかいない家庭が多いため、講師はあえて地震と火災発生時の避難手順を繰り返して説明した。またそれぞれの行動する理由を説明し、帰宅後すぐとりかかるとすべき避難バッグ、避難ルート決定を練習した。最後は賞品をつけた Q&A イベントで締めくくった。一つのコンセントにたくさん電源コード差し込むことや地震発生時の、ドアを開けることなど、都会の人々には聞きなれた災害の常識であるが、へき地の高齢世代にとっては、これまで考えたことがないことで、初めての学びであった。



写真 1：防災頭巾

(3) 親子の防災グッズの事例

①防災頭巾

日本の防災備品の一つである防災頭巾は台湾でも 2000 年ごろより防災モデル園を通して一部の公立幼稚園と小学校に取り入れられている。そうしたニーズに応じ、近年、防災頭巾ビジネスが登場した。商品としての頭巾は統一的にオレンジ色になっている。そこで幼稚園では保護者イベント、親子の防災頭巾のつどいを行い、頭巾に接着剤を使って不織布で装飾し、自分だけの頭巾を作り上げる。このように材料費が安く、短時間でできる親子イベントは好評を得、幼稚園の間で広がるようになった。公からの経費援助のない幼稚園でも親子の防災頭巾のつどいを真似しようとする動きがあった。また、防災頭巾飾りは親と子の共同活動で、子どもの好きな絵図を簡単な貼り付け作業で、天下唯一のわが子の専用頭巾ができる活動である。また「防災頭巾」というタイトルに満足する親は多く、地震発生時の避難品を知り、家庭用頭巾を購入するケースもある（写真 1、2）。



写真 2：防災頭巾飾り

②幼稚園親子防災学習シート

学習テーマに沿う「学習シート」は幼稚園学習活動のまとめとして、学習の有効な手段である。また、学習シートを帰宅後の親子の共同作業と指定し、保護者らに防災活動教育の共同責任を理解させ、家庭で家族と一緒に完成するものであることから、親の教育としても効果があるとされている。保護者は学習シートに署名することによって、子どもの災害知識学習やスキル獲得を喜びながら、保護者自身の防災意識の向上につながっている。



図 1：幼稚園親子防災学習シート

台湾では地震や台風の発生後は、防災、減災についても世論の焦点となるが、その後は、消極的に片付けてしまい、防災意識向上の難しい社会である。そこで、生活の中での防災を意識づけのため、日本の防災グッズの1つである防災頭巾を取り上げ、就学前における親子の防災意識の向上につなげている。このような、台湾での就学前における防災教育をふまえて、特に0～3歳児の親子が集う日本の子育て支援ルームでの防災教育の実践について述べる。

2. 子育て支援ルームにおける実践

本ルームは0～3歳児の親子が年間延べ約6,700人が利用している。子育て支援ルームは、保育所、幼稚園、こども園、学校等のような決まった園児、児童、生徒、学生が利用する施設ではないため、防災訓練の実施方法が難しい。従って、誰もが自由に利用できる施設であることから、緊急時の対応には特別な配慮が必要である。防災については、利用者からも、「もしも災害が起こったら、避難場所はどこにあるのか」「連絡手段はどのようにしたらいいのか」「子どもを連れていた時は、どのような行動をしたらいいのか」という不安の声が聞かれた。

そこで、平成30年度に本ルームでは、「もしもの時に備えて 子育て支援ルーム『かとう GENKi』の親子防災」というテーマで、スタッフによる年5回の親子防災講座を実施するとともに、防災マニュアルも作成した。ここでは、利用者を安全に誘導し、スタッフも安全に避難することを重要視した。

(1) スタッフ研修

まず、本ルームに勤務するスタッフが防災についての知識を得ることが必要であると考え、防災に関する最新の情報を収集するとともに、本ルームが位置する地域の特性を知ることで、災害時の対応に役立つのではないかと考え、この地域での過去の災害の実際について調査した²⁾。その結果、地震・水害・避難所生活に分けて収集したが、地震・水害については、過去に学び得た情報とは違っていた点があった。また、避難所生活については、避難経験のある母親たちの声を集めたところ、日常生活にも活かせるアイデアがあることに気づいた。そこで、ルームの利用者にも最新の情報を共有してもらうとともに、日常生活に防災を取り入れる方法を、親子防災講座のテーマに入れた。

第1に防災に関する最新の情報については、本ルームが位置する地域での過去に起こった災害を、県や市の防災課が作成したハザードマップ³⁾や携帯アプリの地盤サポートマップ⁴⁾等から、土砂崩れでの位置と崩れた方角、土砂の量を確認した。さらに、この地域はため池が多いため、ため池ハザードマップにて水害地域を確認した。また、火災における被害についても、構造物や風向きについて確認した。そこで、この地域では、過去に起こった地震における大きな被害は見られなかったことが分かった。

しかし、今後の予期せぬ災害に備え、ハザードマップ、地盤サポートマップを基に、本ルームに滞在している時に、災害が起こった場合の避難所までの避難経路を地図上に記載していった。そして、スタッフが実際に避難経路を歩き、道幅や段差、ブロック塀など、避難する際に危険がないか、障害となる物はないか等を確認した。さらに、子どもと一緒に避難することを考え、子どもの人数による時間の相違や、自分の荷物の取り扱い等、様々な家族構成を想定して考えていった。

その結果、知識を得ることも重要だが、さらに実際に体験することで気づくことが多いことから、ルームの利用者と一緒に、避難経路を確認することも親子防災講座のテーマに入れることとなった。

(2) 親子防災講座の実施

スタッフ研修での気づきから、月1回テーマを決め、本ルームにて親子防災講座を開催することとなった。開催日時と内容については、事前にHPやチラシにて知らせ、普段、親子が遊んでいる部屋で自由に参加できるよう配慮する。開催内容は以下のとおりだが、基本として家族一緒に楽しみながら、災害や防災の知識を身につけてもらえるよう最新の防災情報をクイズ形式で行うこととした。以下、5回の内容について示す。

【第 1 回】

日 時：2018 年 9 月 18 日 10：30～11：30

参加者：親子 50 名

テーマ：「マニュアルではなく、自分自身の知恵からアイデアを生み出す防災」

内 容：①ビデオ「地震の備え」について

②クイズ「最新防災常識チェック：地震編」に挑戦

③ママバックを避難バックに利用

避難経験者の「今まで使ったことがないものを災害時に使えるわけがない」という声から、毎日携えているママバックを「1次持ち出し袋（ないと困る物）」としての避難バックに利用できる方法を、参加者と一緒に考える。また、「あったらいい物」を「2次持ち出し袋」として分けて準備しておく方法をレクチャーする⁵⁾。

第 1 回の講座を開催する前に、参加者に聞き取り調査をした結果、50 名のうち 32 名が避難グッズを自宅に置いていると回答があった。そのうち、避難グッズの中に入っている物がわかる利用者は 1 名だけだった。その理由として、「セットで購入するので、必要なものが全て入っているから確認しない」という理由がもつとも多かった。また、「普段使わないので、倉庫の奥に入っている」という回答もあり、避難グッズの必要性に対して意識が低いことが分かった。そこで、利用者の避難グッズについて意識を高めるために、避難時に自分が必要だと思うものを付箋に書き、「ないと困る物」と「あったらいい物」に分けて模造紙に貼ってもらう（写真 3）。この内容を基に、第 1 回親子防災講座を行ったところ、「携帯電話が使えなかったら、家族の連絡先が分からないことに初めて気づいた」「災害に遭うのは昼間とは限ってないので、ライトは必須だと思った」など、災害時の避難グッズについて意識を高めるきっかけになった。このように参加者の感想として、「避難グッズは揃えているが、自宅に置いているので外出時に災害が起こった場合不安だった。普段、持ち歩いているバックが避難バックになることを聞いて、早速、やってみようと思った。」や、「防災について意識して考えることがなかったので、良い機会になった。地震についての防災常識チェックもクイズ形式なので分かりやすく勉強になった。またしてほしい。」という意見も出て、意識することについての気づきを得ることが出来た。

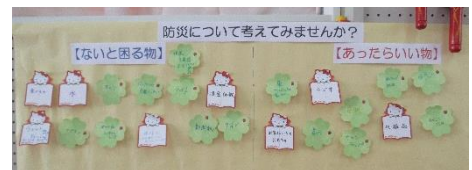


写真 3：避難時に必要だと思うもの

この講座の成果として、以下の表 1 に見られるように、具体的なグッズの段階的な準備が明確となった（表 1 参照）。

表 1：避難バックにいれるもの

1 次持ち出し袋（ないと困る物）	2 次持ち出し袋（あったらいい物）
<ul style="list-style-type: none"> ・おむつ ・おんぶ紐 ・救急用品 ・眼鏡、コンタクトレンズ ・連絡先（家族や友達）のメモ ・お気に入りのおもちゃ ・携帯電話 ・自宅の鍵 ・LED ライト 	<ul style="list-style-type: none"> ・着替え ・現金 ・母子手帳 ・水、おやつ ・タオル ・ホイッスル ・携帯の充電器 ・ウエットティッシュ ・マルチツール など
<ul style="list-style-type: none"> ・水、おやつ ・タオル ・ホイッスル 	<ul style="list-style-type: none"> ・母子手帳のコピー ・電池 ・ラジオ ・着替え ・化粧用品 ・保冷バック ・簡易トイレ ・携帯の充電器 ・新聞紙 ・お気に入りのおもちゃ ・生理用品 ・レジャーシート ・カセットコンロ など ・ライト ・水、食料 ・紙皿 ・救急用品

【第 2 回】

日 時：2018 年 10 月 9 日 10：30～11：30

参加者：親子 32 名

テーマ：「子どもを連れての避難はどんなもの？」

内 容：①クイズ「最新防災常識チェック：水害編・避難所編」に挑戦

②ママバック（避難バック）を持って、親子一緒に避難場所までの避難経路を確認

実際に子どもと手をつないで歩いてみることで、必要以上に時間がかかること、また、改めて必要なものに気づく。また、手をつないで歩くことが困難な場合、兵児帯を使ったおんぶ紐の方法をレクチャーする（写真4）。

第1回の講座では、表1にあるように、1次持ち出し袋（ないと困る物）、2次持ち出し袋（あったらいい物）に分けていたが、本ルームでは利用者の多くが自家用車を使用し、避難場所が駐車場になっているため、「1次持ち出し袋」は普段のママバック、「2次持ち出し袋」は車の中、「3次持ち出し袋」は自宅に保管というように、それぞれの家族が工夫して避難バックの中に入れるものを考え始め、さらに、防災についての意識が高まってきたように思う。参加者の感想としても、「靴箱で混雑するかと思ったけれど、子どもの靴を手で持つことで全く混雑することなく避難できた。こんなに早くみんなが移動できるとは思わなかった。」や「建物が、耐震構造かどうかで避難の意識も変わるとあったので、みんなでアイデアを出し合いたい。」といった、実施したことや、話し合ったことも出るようになった。また、「いざという時、子どもを抱いていると両手が塞がっていて何もできないが、カーテンを割いておんぶ紐にすれば両手が空くので、障害物も除けることができる。」という具体的な工夫も出されるようになってきた。



写真4：おんぶ紐

この結果、表1に加えて、1次持ち出しから3次持ち出しまで出されるようになり、より詳細な持ち出し必要なものが明確となっていった（表2参照）。

表2 持ち出し袋に入れるもの

1次持ち出し袋 (ママバック)	2次持ち出し袋 (車の中)	3次持ち出し袋 (自宅に保管)
<ul style="list-style-type: none"> ・おむつ ・水、おやつ ・現金 ・携帯電話 ・自宅の鍵 ・ウエットティッシュ ・眼鏡、コンタクトレンズ ・連絡先(家族や親類、友達) ・LEDライト ・ホイッスル ・生理用品 ・母子手帳 ・健康保険証 など 	<ul style="list-style-type: none"> ・着替え ・携帯の充電器 ・お気に入りのおもちゃ ・水、食料 ・保冷バック ・ラジオ ・マルチツール ・救急用品 ・ブランケット など 	<ul style="list-style-type: none"> ・母子手帳のコピー ・携帯の充電器 ・お気に入りのおもちゃ ・電池 ・現金 ・着替え ・水、食料 ・保冷バック ・サランラップ ・レジャーシート ・カセットコンロ ・化粧品 ・救急用品 ・タオル ・新聞紙 ・ラジオ ・タオル ・紙コップ ・紙皿 ・生理用品 ・ライト など

【第3回】

日 時：2018年11月6日 10：30～11：30

参加者：親子62名、学生3名

テーマ：「地域で力をあわせて助かる可能性を増やす：山国地区合同避難訓練」

内 容：①ビデオ「南海トラフ地震」について

②クイズ「最新防災常識チェック：まとめ」に挑戦

第 3 回では、同じ敷地内の近隣の大学附属幼稚園、附属小学校、附属中学校と一緒に合同の避難訓練を実施した。本ルームでは、大きなスクリーンにDVDを投射し、南海トラフ地震が発生、加東市は震度 6 弱、揺れの時間は 3 分弱を想定した。そこで、本施設は、震度 6～7 に達する大規模地震で倒壊、崩壊しない、新耐震基準の建物のため、揺れが収まるまで身を守ることを訓練した。揺れが収まったと想定した後、避難場所である正面の駐車場に全員で移動する（写真 5、6）。その後、人数確認をし、附属学校園にきょうだい通っている家族は、指定されている引き渡し場所へ向かった。

この合同訓練に参加した者からの感想として、今回初めて参加した親子から「子どもが 2 人いるが、外出時に抱っこ紐を持ち歩いていないので、2 人を抱えて逃げる時に困った。」や「子どもが逃げる時にぬいぐるみを持っていて、こけた時の事を考えると、大人だけでなく子どもも両手が使えるようにしておかないといけないと思った。」や「子どもが大きくなってくると、最低限の物しか鞆に入れていないので、非常時の物が入っていないことに不安を覚えた。」という意見が出された一方、これまでの講座に参加された親子からは、「抱っこをしていると、自分がこけた時、子どもが下になるので危険だと思ったが、おんぶ紐の方法を教えてもらって、それなら、こけても両手をつけるので安心できる。」や「荷物を取る時に混雑して、なかなか準備ができなかった。」や「2 人の子どもと荷物を抱えるのは大変だった。また、上の子は、いつもしているように、自分で靴を履きたがるので、時間がかかり困った。」等、おんぶ紐の効果とやはり、実際にしてみると難しいことがわかったという感想が寄せられた。しかし、合同訓練の中で実際に実施することは本ルームにとっても大きな体験で、継続的に実施する必要性を感じた。



写真 5：親子で避難中



写真 6：避難場所での人数確認

【第 4 回】

日 時：2018 年 11 月 29 日 10：30～11：30

参加者：親子 50 名

テーマ：「身の安全の確保と防災グッズを使ってみよう」

内 容：①身の安全を確保できる場所の確認

②防災グッズを使ってみよう「簡易トイレの使い方」

第 4 回目は、ルーム内で、親子一緒に身の安全を確保できる場所や物について参加者と考える。特に、防災上でもっとも大切な「簡易トイレ」の使い方や、水分吸収量について実験をとおして学んだ。その結果、参加者の感想としては、「遊びに行く場所で、布団、マット、クッション、おもちゃ入れのカゴ、リュックなど落下物から頭を守る物を考えた事もなかったので勉強になった。」や、「プレイルームのすべり台の中や机の下、鞆を置いている備え付けの棚の中が意外と広いので、子どもを隠せる場所になると聞いて安心した。」「1 回目のレクチャーで、便利なグッズ（簡易トイレ）があると聞き購入していたが、使い方がわからないといざという時に役に立たないことがわかった。」「どのくらい水を吸収するのかわかるとして遊び心で水を入れたが、意外と吸収し、ゼリー状になるので、処理が便利だと感じた。」等、防災の簡易グッズの仕組み、使い方がわかることで、「普段の生活で使っているものを利用して出来そうな気がしてきた。」という

【第 5 回】

日 時：2019 年 1 月 31 日 10：30～11：00

参加者：親子 48 名

テーマ：「山国地区合同避難訓練の振り返り」

内 容：①映像からの気づき

②今後の課題

2018年11月6日に行った、「山国地区合同避難訓練」の映像を見て、気づいたことや、今後の課題及び親子防災講座の内容について話し合った結果、合同避難訓練当日に参加者に聞いた感想の中に、「2人を抱えて逃げる時に困った」「靴箱のところで混雑したので大変だった」「荷物を取る時に混雑して、なかなか準備ができなかった」とあった。今回、映像を見ても、「荷物を取る際に混雑しているので危ない」「きょうだいがいるお母さんは大変そうだ」という感想があった。そこで、今回の講座では、「どのように危険を回避すればよいか」また、「母親の負担を軽減する方法」について話し合った。「荷物を取る際の混雑」は、荷物を取るからではなく、同じ場所に置いているおんぶ紐を取り、その場で、子どもを背負っていたためであることが分かった。そこで、回避方法として、「おんぶ紐は、母親が身に付けたまま過ごすことも出来る」「おんぶ紐は、荷物と別の場所に掛けておくこともできる」という意見がでた。また、「きょうだいがいる母親の負担を軽減」については、人数が限られているスタッフの援助だけでは足りないため、「周りの大人の臨機応変な援助が必要」という意見もでたが、中学生のきょうだいを持たれている母親から、「中学生ともなれば、大人以上の力を発揮する」と、経験者らしい意見が聞かれた。

これらの避難訓練を含めた5回の講座をとおして、保護者と実践することで、少しずつ、災害へのグッズの準備と具体的な避難経路への意識が高まっていったことがわかった。

おわりに

以上、台湾での防災教育の実際と、周知の方法、危機感の共有方法は、本ルームにおいても実際の講座を繰り返すことで、意識の向上、特に、いつ来るかわからない災害への備えの意識を高めていくことがわかった。防災こそは、日常の意識の持ち方が重要であることは、承知しているが、いずれも、地質等の地域性による危機感の共有方法が基底となって、いのちを守るための日頃の意識に向け方であり、それらが、具体的には日常的な持ち物や行動という形になってあらわれることであるからこそ、日頃の防災への訓練が必要となってくるということが明確となった。それは、形式的な訓練の繰り返しではなく、意識のあり方へ照準を合わせることで、当然講座等の内容は変化するべきある。また、台湾の事例にもみられるように就学前の計画的な防災教育としてのモデル園、教材開発を実施し、全国的に展開することも必要であろう。

さらに、そこには、その意識の形成が重要であり、しっかりと時間をかけて着実に保護者や子どもの環境に対する理解と思いやりを育てていくという方針を忘れずに進めるべきである。意識については、自然の恩恵を被っている以上、自然のもっている脅威をも考え、「もし、ここで地震が起こったら」ということを日常の日々の中で考えながら行動することであろう。もちろん、他の水害、台風等も含めて危機意識は防災のスタートであり、さらなる行動へとつながっていく。自然との関わりをさらにもつためには、自然環境への関心を深めるとともに、自然からの恩恵と脅威という、自然に対する畏怖をもつべきであると考えらる。

我々も自然の一部であり、自然との共存は当然のことである。その理念をもって、さらに、今この場所、この時点での防災のあり方を考え続けていきたい。

注)

翁麗芳（台北教育大学）2018年9月にHORN（ひょうご震災記念21世紀研究機構 兵庫海外研究ネットワーク）により兵庫教育大学に来日。

引用文献

- 1) 富田久枝他（2018）『持続可能な社会をつくる日本の保育 乳幼児期におけるESD』かもがわ出版
- 2) 兵庫県 HP 兵庫県を襲った過去の地震 https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk37/pa18_000000025.html
（最終アクセス日：2019-02-27）

- 3) 加東市総務財政部防災課作成「加東市ハザードマップ～洪水・土砂災害編～加東市全域・社地区」
www.city.kato.lg.jp/kakukanogoannai/soumuzaiseibu/bosaika/bosai001/1462760729988.html
(最終アクセス日：2019-2-27)
- 4) ジャパンホームシールド「地盤サポートマップ」<https://www.j-shield.co.jp/1million/cp2.htm>
(最終アクセス日：2019-2-27)
- 5) あんどうりす (2017) 『りすの四季だより』 新建新聞社